教草女房形氣

山東京山著

巻三

へ13
3580
3

門へ13
號3580
巻3

明治戊寅冬補刻

山東京山著
歌川豐國畫

教草女房形氣

全部二十五編揃
都合五十巻の内

姫上手於兼の傳　自三編至六編

此讀切を第二輯と極

浪華書肆　前川文榮閣藏梓

早稲田大學図書館
昭和35.1.22
購入
漢書

王勅をうけたまはりて筆を執て食ひ
とゝ云ことは湖上の芦の葉の十種九種の曲こと書
肆のおつらへ招ひやあるけんうしの初の刻を過て足を停め
の草澤ふ踏ちこ探るこ名の決とよのごと七事あ
いつたくさのもとど今はくるみんと洗濯もあるもどの
本林のあちこぎすおちうの帰くこ編の女房形氣さん
きのたのぶとりそうあいこまきこうしやうのもとへゆも
かるとて王勅をうおらくおわがはるあきの筆もとを揉ぬる
弘化三年丙午仲夏稿本同仲秋上梓
丁未正月の新板
山東菴京山

いせ七
中二三度

あちらく

清書

第四編

そあ分やのつまおちらくいきのゆあ吉田

火の用心

その二

女房形氣三編下の巻

○第七限

十月八日より六月とそ日本国中やはりよろづの神くらものの大やうそ
あつまりまする神をまつるとなり
なるゆへ六十六ぶの神くらものをまつるとなり
まつるなり
をきはじめ神くらものの
そのとき五くのよりあををたべ
氏子のえんむすびとえんのふしをの
ぢつて来やうのはさうだんさせまさ
神はいやれよろづの神のつとめをも
たへいのでもー神はいざるをりかのえんむすびと
町ぶをもまもりー又女のれいはいかに
男のれいは大きく女のれいはちいさて
大ふやそいんやくとワラ一つをはいつもく
こりとこのるうをとは男と女とをやく
まきたるとうや神のをるるもやくをもう
神風の神とくさう神ひんなん神
をとはいちりをとてかをのろいをまが
人やーろのえんのやとをれわるまりて
人ふとりとくさうくえを
なすなり

ちくわ

▼かるねあやこへちさうのさるゐ
さらさやらんちろくぎきさろけれど
いんきさかさろふをり
よりとよろこび
ふたとのり
ちさらしてゐるごたへ
こわい世と
ちりねへひき
あわせるも
いきよ
ふらふ
てんあんの
むろれど
さらさふ
ハさらふ
さらさ
かねいのと
よろそり
ちろれども
十七のよへむすめ
廿二のよへむすめ
内あいりふのふ
やらんちるべらば
○かそちろねあーくい

あきまへ上る日ゑれがやど
ゆもりろく用ありとて
さろつきゆとさあさせ
かぎくれ礼とのべて
たちろりね

[その二]
かそりんきよ
さらさやふ
むろんろの
さすめの
てちやい
あさこや
九四ふりん
とそかうがの
丁の小ま
ものやせざれ
ゆこるも
ちりいをと
あるろけろの
でるしゞ二の
うのの井さね
ゆふ付の庄さ
公ふりて次▼

第九の段

あらため廿一
でござり
まするる
まことにいなる
まそこも廿二よりはいりまるる
おそくるあるまいぢやこざりま
せぬることもつともるるらいぞは
母にあてがちぢひまをぐーとさえ
もあるりけりけりときかる
よりれ上をつとむるあひべやの
そーまの女中母ぐたうこくの
てのをとこてきのぞくふおりひいあれ
なまつのりあいまぞくりつともじやぶ
よいにるるるぐそれをまつさいえく
かこつけてあんごまこのいなれーも
なるあるおやもよーやあまへがあい
とまのでいくーこてあさーつく
ゆもそーぢよいにいなーとのあ
入りーてあやたちへあんどさまをが
孝るるーあるでへまーあるねをあむこ
さんがりのやのく人母いそなよりるふまるく
さえよりーどとの男でござりますとの
あひざあまるきんよそでるちあいまーて
そまるくのさうだんでどざります
女中一おるねらやでるくばりまるきこい

（廿五年）あめのごとくたち

（二）のんどく祢さあが
ふーてれすびこふこ
えんるれがなびこふり
るるもいとまものるるし
めぞーうくとん足つもすこ
ふるふのるるいふも
さーるるりよあこあるるうとも
むるまーくよるるざさてるう
かるるの上下ーくーく
わ者るくまけれふかの
りんきよあれるデそこさ
だるうーやーこびを
るるぞけりとれまるくく
おるるがさあるて
こちるそでゆざー
よきるあるり
かくておられ九のと男
のるとまるけ　こまびあや
たちのよるこび初のやりの
ゆだえこ
めぞーしく
とだるるるこ
けるえとん
まのてとち

（廿五年）あめのごとくたち

ゆれんのうちあとまわがそかと
つてこいとれまでのこちりも
あるまーこ
ちるれかい
ゑ父ゑるう
るるるる
るるるるえ
るるるる
とるる
あるく
の
あるさ
ひるるも
るるるる
あさ
のこ
ゆ上
まるす

第十編

おるる
とる
さる
ちるる
ぐるんぐこえ
まえゆも（一）

うちふりんとるるうるれば
ふるるるゆもぐく
るるるるるるる
るるるるるる
るるるるる
るるるるる
る

▼おそくまでの女かけいかるいそんる
女でるきゝる左のごとく
●そもく　ひそめつけやい大きゝるくらし
まる西ゑ町人るぐらも下女五人ありて
そのるつふきゝれんのこ月ゝるめ
つくふのるゝことゝとゝ十八かゑんつる
るゝゝるれとゝいろ白くあのけうあるそ
男のさくふゝるりうまゝ三ゑるてんゑ
るまどごとゝ四十二のかれとゝいたちそ
ゑくのゝとりゑまるゝとゑ西ゑゝせのゝのゝと
ゑさけるゝゝるどけゝくるゝ　ゝゝるふゝるゝるゝ
ゝゝたゝるゝどゝゝゝゝれ目をけゝたゝ
ゝゝそれとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

第十話

その二

たろ吉
おうね

やらう吉
四十二匁

さらえりん
ふるね
オ十二月
かんてい日
あらるる

明暦志水著
東洋源兼淡
考槃餘事 四巻揭明朝繪 文房常用家必用之書也 全四冊

題画詩則 全二冊

題画詩類 全壹冊

奥類先生撰輯
書画略自宜

書家必用の小冊 諸家の真跡 [illegible]

書肆 大阪北久寶寺町心齋橋 前川源七郎梓